別紙１－１

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　甲　第　　号

氏　　名　　川路 具弘

論　文　題　目

じん肺健診受診者における身体活動量の要因に関する研究

論文審査担当者

主　査　　名古屋大学教授　　亀髙　諭

名古屋大学教授　　川部　勤

名古屋大学教授　　内山　靖

別紙１－２

論文審査の結果の要旨

じん肺は代表的な労働関連呼吸器疾患であり、完治することがない疾患である。そのため対症療法が主体となる。呼吸リハビリテーションの運動療法プログラムやその効果については、主として慢性閉塞性肺疾患(Chronic Obstructive Pulmonary Disease; COPD）でのエビデンスは示されているが、じん肺患者の呼吸リハビリテーションに関する研究は少ない。先行研究では、じん肺患者の多くに呼吸困難感や筋力低下、身体活動量の低下を認める一方で、身体活動量と身体機能とは関連性がなかったことが報告されている。

身体活動量は、慢性呼吸器疾患患者の生命予後の最も強い予測因子であることが報告されており、身体活動量を改善することは呼吸リハビリテーションの最終的な目標の１つである。しかし、呼吸リハビリテーションの身体活動量改善に関するエビデンスは示されておらず、効果的な介入方法は確立されていない。これは、慢性呼吸器疾患患者の身体活動量に影響を与える要因が多岐にわたることが一因で、健常高齢者などでは身体活動量に心理的要因や環境的要因が関与することが報告されているが、慢性呼吸器疾患患者ではそれらを含んで検討はなされていない。

そこで、本研究では心理的ならびに環境的要因を含んだ身体活動量に関連する要因を明らかにすることを目的とした。

じん肺健診受診者 185 名を解析対象とした自記式質問票を用いた本研究の新知見と意義は要約すると以下のとおりである。

1.基本情報、単相関係数等の分析を踏まえてパス解析をおこなった結果、呼吸困難感と結果期待がじん肺患者の身体活動量に有意に影響を与える要因であった。

2. 呼吸困難感は､身体活動量に加えて QOL など多くの要因にも影響を与えており、じん肺患者において主観的な困難感に対する評価と治療/介入の重要性が示された。

3. じん肺患者では、健常高齢者や変形性関節症患者などとは異なり、自宅周辺環境と身体活動量には関連がみらなかった。

4. 身体活動量を向上させるためには呼吸困難感を改善する動作・活動方法の介入/指導とともに､結果期待を高める動機づけや行動変容への働きかけが必要と考えられた。

本研究の要旨は、BMC Pulmonary Medicine 22,2022(IF: 3.317)に掲載されている。

以上の理由により、本研究は博士（リハビリテーション療法学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

別紙２

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※第　　号	氏　名	川路 具弘
試験担当者	主査　名古屋大学教授 亀髙　諭	名古屋大学教授 川部　勤	名古屋大学教授 内山　靖

（試験の結果の要旨）

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

１．呼吸リハビリテーションの対象となる慢性呼吸器疾患について各疾患の病態の理解について

２．COPDとじん肺患者に対する現在のリハビリテーション方針の相違点及び類似点、およびその効果について

３．心理的要因に着目し介入する transtheoretical model (TTM)について、TTMの結果期待と呼吸困難感のみが身体活動量に直接的な影響を及ぼすことについて

４．本研究の結果を踏まえた、じん肺患者に対する新しい呼吸リハビリテーションプログラムの可能性について

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、リハビリテーション療法　学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。